
全世界の力を手に入れる方法論

齋藤尚彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全世界の力を手に入れる方法論

【Nコード】

N0563Z

【作者名】

齋藤尚彦

【あらすじ】

人はなぜ死んでいくのだろうか？

誰も僕の周りにはいなくなっていく。

そして僕は一人、空間で遊んでいた。

何気なくあれから10年後の執筆（前書き）

あれから10年…

何気なくあれから10年後の執筆

明日もこんな感じで過ぎていくと思うと、腹立たしさを覚える。

たまには、喫茶店でも行きたいが誰も仲間はいない。

僕は常に一人で10年間を過ごしてきた。

仕事はしていたが大して稼ぎはなかった。

なぜならあまりにも僕は大した人間ではなかったからだ。

それは僕が、自分を常に隠す癖がついていたせいもあったからだろ
う。

どうしても僕はこのとにかく自信がなく、不安げな性格のトラウマ
が理解出来ずにいたし

そんなの理解させてくれるような人がいるようなものなら、むやみに
イメージの中でボコボコにしていたかもしれない。

しかし、僕のその尻拭いは自分ですることは事実であった。

そんな中ときは2011年を回って2012年に変わる節目だった。

僕はなぜか29歳の頃召喚を覚えてしまった。

その理屈はどうでもいい。

ある人はそれを殺気のように感じ取り

ある人はその空間に入ることゝためらった。

だから僕の存在は常に周りの人から一目置かれる存在だった。

が僕はいつも何故か馬鹿にされていた。

それが僕の業だったからだろう。

どうでもいいことに僕はいつもこの仕事を何か不思議に思っていた。

僕はそれでお金をもらうわけではないが、常にそれを気にとめていた。

それは召喚を使いありとあらゆる、試しをしてみることだった。

この事はあとから色々僕に、副収入をももたらしてくれたりもした。

その能力をひと通り書き記す事にする。

それは、白魔術と召喚魔法、時空魔法の話である。

やはりこの魔法群はこの世に存在しうるのだった。

なんだろうか？と思われるだろうが…

これは誰にでも使えるものでもない…

とも言いきれない???

が誰もまだ伝授はしていない。

一人だけこの方法をすべて話したいと思っていたのだが…

だれも、この魔法を理解しようとはしないし、だれかに話そうものなら

前者の通り僕は変人あつかいされていただろう。

だから世の中などほっておいて僕はひとりでこの魔法を使いこなすことだけに

専念していた。

クルシユナムルティは言っていた。

心理的時間空間は存在しないと。

全ては物理空間のみでのみ存在しうると。

しかし、それは提言だったろう。

僕はこう思う。

こう言わなければこの科学の繁栄する世界において
皆彼のことを変人あつかいしていたにすぎない。

だから僕はあえて言うとも彼も心理的時間空間の持ち主であったのだ
ろう。

というより使い手だったのだろう。

あらゆる人はこうだろうか。

人は人間関係の中でのみ個々の個性を作り上げる。
すなわち人間関係や社会との接点の中でのみ、
人間という形を作っていけるのだと。

それに異を唱えるのが心理的時間空間だとする。

その理由は、時間を無限としてしまうこの力だ。

人間が生きていく上で何が必要なのかは自ずと見えてくるだろう。

果たして僕はそんなくだらない気が付きをとくにみんな済ませて
いると

思って10年間を過ごしてしまった。

しかし誰一人僕のレベルに到達している人は周りにいなく…

くだらない茶番的な宗教家の系に操られているレベルの人間の
世界にいるという僕のその存在に気がついてしまって。

僕は思った。

どうしようもない…

この世の中だったと…

そう、そのレベルだった…

いまだ世界は…

1章「始まり」

あれは何年か？

僕はある日何食わぬ顔で歩く一人の男性を見つけた。

彼はなぜか僕に対して何か話しているように思った。

それは、不思議な出会いだった。

そろそろ僕も19になろう時だった。

もう青春も終わりか？と思う自分に

なぜかもう少し何かあるような雰囲気を持っていながら
僕はもうこの歳で可能性も何も無いと思ったいた。

それも10年後も常に同じだった。

この若さで何もかもつまらなく感じるような何か
不安感も感じつつ人生にさしたる期待も持たず。
この歳を過ごしていた。

それが不況がやってきたこの僕の青春時代だった。
世の中は常に激動の日々で先進国はすべてもう終わりだとさえ思っ
たりもした。

それが今の僕にはやはり同じに思えた。

その人はこういった。

何か不思議な人だった。

狂っているのでは？と思うほど不思議なことばかりつぶやいたりもした。

この歳僕は不思議な人とはかり出くわすことになった。

あるその一人は僕にいろいろなことを教えたが1つだけ自分を見失うなよと言いつつ残して僕の前から消えてしまった。

すごい人だったのは覚えている。

その人は何千人の教え子を持っていると言っていた。

それはどうでもいいことだった。

その人は何千人の顔を見つめてきたということがよりすごいと思った。

その人は高校生の塾の先生だったという話だ。

その人は僕のことをこういった。

君はなぜここにいるのだね？

君が来ることを僕は知っていたのだが…

ある意味君は勿体無い… 大学に行きたまえ…
といった。

最後に別れ際に、自分を見失うと言い残した。

もう一人はひろといい彼は僕にいろいろな不思議な技を見せた。

彼は何かを使うと僕は思っていたのだがそれが何かわからないまま僕は

彼から姿を消してしまったのだった。

この歳すごいレベルの人に出くわすことが多々あったのだが最終的に僕はそのレベルに達することになった。

それがなんなのか？

ようやくわかった。

霊的世界？

というか、何だろう？

不思議な世界だった。

ともあれ、彼らは今どこに住んでいるのか？
さえ僕にはつかめない。

ところでもう一人の人がいた。

彼は将棋をしたとき僕にわざとばんをヒックリ返したあの、
ありとあらゆるいちやもんをつけてきたユニークな人だったが…

かれの凄さもまた凄まじかった。

しかし彼の強さはその何かの気迫のような絶対的自信と事実だった。

なぜか負けるといふ言葉が彼にはないように思われた。

もう一人は、不思議な人で落ち着きと大人の雰囲気とすごい筋肉の
鎧のような体を

した男だった。

その人は僕らのもとから一番にいなくなってしまったが。

もう一人僕を友達と呼ぶ人もいた。

彼は僕に何気なく話しかけてきた。

僕は彼の誕生日を一発で言い当ててみた。

その時はなぜか言い当てて見たかったのだ。

それがあたってしまつて彼は驚いていた。

そしてもし最初に買ったCDを教えてくれたら嬉しいといつたので
僕は言った。

レッド・ツェッペリンのCDだと僕が話すと
彼の目が少し輝いた。

そして僕は、彼に僕の数字的な秘密を教えてみせたとき、彼はまたそれに驚き、僕に色々近づいてきた。

その時の僕はなぜかつまらないことに思えたがもう少し、僕も何かきつかけさえあればまともなストーリーを人生において歩めると思っていたのだが。

僕はここで人生を棒に振ってしまう結果になったのだった。

たぶん彼らも、ある意味力をそぎ落とされてしまっているだろう。

この世界の覇者になるべき存在を消す何かの組織に…

2章「その後」

僕はある意味危険な身だった。

それは、その存在だった。

僕は何かいつも常に誰かの存在を感じていた。

それは危険を及ぼす存在だった。

それは、僕のことを常にチェックしていると思っていた。

そう、その組織だった。

僕はそれを無視できなかった。

だからそれを、10年間何か判明させるためにただぼーっとして過
ごしてもいた。

しかし世界の運命を変えられないように僕は自分の運命も変えられ
なかった。

世界にリーダーが存在するように何かの力がないとこの世界は代わ
りはないと
それが示していたように。

そうだった。それは常に僕に何かを訴えかけていた。

そうだった。

僕は10年後気がついた。

あそこの中で何かかもみ消され10年間にわたりまたその組織が牛
耳り続けるために？

今、その力たちは封印されていたのだろぅということ。

ぼくは、晴れて10年後それを完全に復活させることに成功した。

そしてそれとともに、安定も取り戻しつつあった。

3章「力を手に入れる旅」

僕は何かのために力を手に入れなくてはという衝動と
もうどうしようもない、世界のそのつまらなさを感じて生きていた。

それが25歳ぐらいの時代だった。

どうしようもなく喧嘩もし、
常に不安を感じていた。

そして組織に対する絶対的な何かの恐怖をいだいてそれに従っていた。

そう、何かの組織か？それはわからないが…

僕はあらゆる存在を否定し続けていた。

親や兄弟それらさえもう信じられずにいた時代…
19歳。

そして何もかもの下に敷かれ自信を失いボロボロになっていた25歳。

そして最後に29歳から、前向きに生きていくことを選択した時代。

そして力を手にしだした30代

そして今、僕は完全なる魔法を手に入れた。

その魔法を手にし、

僕は何もすることを失ったようにさえ思っていた。

そして僕は日雇いという仕事をするようになっていた。

世界は不況とパニックのどん底だった。

僕は、何か自分のその自信のなさとかくだらないという思いと
何もかもを気がついていながらそれに対して誰もが
常に発信さえしない時代だという
この何かに常に不安を抱いていた。

誰もが真実を語らず誰もが
真実に気付こうとさえすれば気がつける時代だった。

僕はそれに常に戦っていた。

そしてもう世紀も終わりを告げる時だった。

僕はもう、この話はしてもいいと思った。

そしてその口を割ることにした。

マニュアル

それ以来というものの、僕は対して仕事も本気でする人間にはなれなかった。

ある時、門さんと言う友達と出会って、僕は彼といろいろと話をするようになってから、自分というものがわかってきたような、気がする。

門さんは、言った。

僕のような奇才は、ほかにいないのだから、世の中に埋もれている、ことももったいない。

絶対に出て行くべきだと。

それはさておき、喫茶店で僕は話をいくつかした。

まずは、エネルギーについて。

僕がした、エネルギーの話とは、こうだ。

エネルギーとは、人間はいくらでも生み出すことがでいきる。

しかし、意図して自分自身のエネルギーはわけすることはできても、気などのエネルギーというものでさえ、

人から奪うことは難しく、増してはその人になんのダメージも与えずに、ものなどからも得ることは至難の業だに思えると。

しかしこれは僕は意図も簡単にできる方法を知っていると言った。

その方法とは、僕はまず、美術を例に取って言ってみた。

美というものは、たとえば絵をとってみて

絵は人に感動というエネルギーを与える。

それは描いた人は一人でも何人もの人に無尽蔵に永遠にエネルギーを与え続けるものだ。

これと人が人に与えるエネルギーなどと違いはいつたいなんだろうねと僕はその60を超えた人に訪ねた。

その人はまた、うんちくを述べ始めたので僕は言ってみた。

その違いは自分自身から発生する記憶や気などのエネルギーを誘発させて感動という課程をへて、それをエネルギーという循環の法則をつかって自分で吸収していると思いませんか？と

しかし彼はまだうんちくを垂れているので、僕は結論を言ってみた。というより方法論を言ってみた。

これは、なかなかの知恵といってもいいとおもう。

ことによってはこれを使って無尽蔵にエネルギーを生むこともできる。

まず、記憶と言う力を使うのである。これがキーワードだ。

1、まず美しいみるに値するものを記憶するために、ぼけーっと眺める。

2、それを記憶したら、放置行程をとるために、頭の中で10年間の記憶を続ける。

（10年間の記憶方法とは、頭の中で、その記憶媒対象たるものを1単元として、それをテレビ映像などになぞらえて、画面に移しているイメージをする。次にそのイメージの画面を10個コピーする。そしてそれを×10個コピーする。すると100個のブラウン管映像が生まれる。これら二つ一つにランダム計数を掛けあてて、今度はシミレーションを100通り行う。そしてそれをさらに10回かけて、10回かけていくうちに10000回ぐらいには膨れ上がる。

そうした後、それを一気にストリームにして再生して意識をすべての画面に向ける。）

（その後で今度は10年間記憶し続けるそのことの修行に入る、といっても本当に10年間をその記憶の為に費やすのではない。

実際は脳味噌はその作業をした時間空間を過ごすのだがアトマン（本人自身はそんな存在体験の世界にはいない）ではまず方法だが1秒を10回かけて10秒かん数える。そこまでは時間軸は一次元で進んでいくが次に今度はそれを10個のスレッドを起こして10倍する。すると10人の意識が10秒づつ過ごすので10倍のスピードで脳味噌は時間を過ごせる。要するにCPUをいっぱい作るイメージだ。

それを行ってからマルチ速聴効果で鍛えた右脳をフル活用して、それを今度は、10倍速する。すると今度はそれをさらに10人の人間に行わせるもちろん自分の中の人間に。すると10年間一日10000回復習したぶんぐらいの体感学習ができるのだ）

それを使って今度は

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0563z/>

全世界の力を手に入れる方法論

2011年12月3日22時54分発行